



モテモテさがは、佐賀を面白くする小さなママメディアとして、これまで歴史や文化、人物、いろいろな活動などを紹介してきた。2周年を迎えるにあたり、さらに「佐賀に欠かせない」みなさんから愛されるフリーマガジンとなるべく「次のステップ」をテーマに、いくつかの壁を乗り越えてきた経験を持つ人に話を聞いた。

今月AKB48を「卒業」する前田敦子さん。佐賀との接点は少ないが、今最も「次のステップ」が注目されている一人ということが出来るだろう。前田さんにはこれまでの思い出や、今後目指すものなどを聞いた。「期待に全力で応えたい」と語る前田さんの真摯な態度には、国民的アイドルのセンターというポジションを「卒業」しても揺るがない自信を感じた。

一歩一歩階段を上るように、挑戦を積み重ねた人は佐賀にもいる。2014年に開催される

MOTE MOTE さが 2周年特別企画

次のステップへ

ソチ五輪での金メダルを目指すプロスノーボーダー加藤彩也香さん(19)。佐賀出身、国内に公式戦がない種目、大げがなど、たくさんの試練を乗り越えて、今シーズンからワールドカップに挑戦する。iPadアプリなどを開発する株式会社センターウェア代表取締役・武藤樹一郎さん(37)はアメリカでの生活を経て独特のアプリで次の波に備えている。靴工房ジャンボを展開する株式会社ティックワールド代表取締役の田村繁幸さん(75)はオイルショックや阪神・淡路大震災など予期せぬアクシデントをくぐり抜けた経験から、佐賀という場所の未来について語ってもらった。

先行きが不安な時代だからこそ、これまでの流れに身を任せるわけにはいかない。勇気を持って次のステップへ。佐賀を面白くするための地道な一歩になれば良いと思っっている。



プロスノーボーダー
加藤彩也香さん



株式会社センターウェア
代表取締役 武藤樹一郎さん



株式会社ティックワールド
代表取締役 田村繁幸さん

「必要とする人の期待に全力で応えていきたい」。今、日本で最も「次のステップ」に注目が集まっている前田敦子さん(21)。ドラマに取材に大忙しの前田さんに、ラジオ番組の収録前の貴重な時間をもらって、佐賀のみなさんへのメッセージを頂きました。AKB48での思い出やこれからのビジョンなど素顔の言葉で語ってもらいます。

(聞き手＝本誌発行人・橋詰空)

前田敦子さん(21)

レコ大が一番の思い出

★3月25日のさいたまスーパーアリーナでのコンサートで、2005年から在籍したAKB48からの「卒業」を発表。いよいよ8月24日から3日間の予定で開催されるAKB48初の東京ドーム公演と27日の劇場最終公演が迫っています。AKB48での活動を振り返って、一番楽しかったことは何ですか。

「楽しかったことはいっぱいありますが、スタッフさんや秋元康さんを含めて、みんなと一緒に喜びあえたのは昨年の日本レコード大賞の受賞です。夢のようでした。それをとれていなかったら卒業を決断していなかったかも、というくらい大きな出来事でした。」

★ファン投票による「選抜総選挙」で09年と11年の2度、首位を獲得。グループの中心的存在として活躍していました。国民的アイドルグループのセンターとして、想像できないようなプレッシャーがあったと思いますか。

「自分では感じていなかったつもりですが、でも卒業を発表してから、すごくスッカリしているように見えると言われることがあります。秋元さんたちからも、きっと今までプレッシャーを感じていたんだらうね、と声を掛けてもらいました。」

★若い時からセンターを務めていましたが、自覚が芽生えたきっかけは?

期待に全力で応える



たときには、ああ自分で引っぱり張らなきゃという思いがありました。

★AKB48で一番大変だった思い出を教えてください。

「昨年夏の西武ドームのコンサートは半分外だったこともあり、体力が全然ついてい

た。★今年公開されたAKB48のドキュメンタリー映画第2弾「DOCUMENTARY of AKB48 Show must go on」少女たちは傷つきながら、夢を見る」にも描かれていたね。前田さんが過呼吸の発作に襲われながらも、美しい笑みを浮かべて「フライングゲット」を歌うシーンは衝撃的でした。

「普段の劇場は収容人数250人ですが西武ドームは3万人。大きなステージは実はあまり経験していません。すごく悔しい思いをしました。今思うとこれからのつながる反省点が見えた体験になったから良かったのかな、と思います。メンバーみんなが、つらい経験をした日でした。AKB48もまだまだやらないといけないことがあると感じました。」

いろんな経験をしたい

★いよいよ8月末に卒業です。AKB48時代とは時間の使い方など、いろいろ変化があると思います。今後、取り組んでみたいことはありますか。

「時間の使い方に関しては良くも悪くも、すごく自分の時間ができると思います。今まではもしかすると、もっと時間が欲しい、と思っていたのかもしれない。実際、時間が出て来ちゃうと、何をしたいのか分からない自分が出て来ちゃうと思はもったいないか

ら、例えば一週間時間があるんだったら、違う所に行ってみるとか、いろんなものを見に動きまわりたいですね。いろんな体験を出来る範囲でやり尽くしたいと思っています。

★例えば、どこに行きたいですか。

「イタリアのミラノにあるレオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」を見に行きたいです。去年パリに行ったときに、たまたま時間が出来たので、ダ・ヴィンチの「モナリザ」など、いろんな絵を見ました。マネージャーさんが詳しく解説してくれて面白かったです。死ぬまでに絶対いろんなところへ見に行きたい方が、良いよ、というアドバイスにすごく影響を受けました。日本で待っているだけじゃ絶対見終わらないので、世界の美術館巡りをしたいです。」

★日本国内ならどういうところに興味がありますか。

「とてどうなるか。一人でどこも行ったことがなくて、近くからでもいいので一人旅してみたいと思います。北海道とか沖縄とか一人で行ってみるのも楽しそうですね。メンバーの中には一人で沖縄にダイビングにいったり、いろいろな人もいます。そういう経験はないの

で憧れます。

★例え、夏が終わるまでに自動車の運転免許をとりたいたいです。免許を手に入れたら一人でいろいろな行ってみたいですね。

★佐賀県にいらっしやったことはありますか?

「両親は福岡県出身なんですけど佐賀には行った事はないです。何が有名ですか?」

★佐賀は北は玄界灘、南は有明海と2つの海に囲まれていて、独特の海産物を味わうことができます。特に呼子のイカは新鮮で身が透明。醤油がいらなくらい、甘くて美味し

いです。また日本のお茶栽培発祥の地、嬉野茶なども有名です。佐賀牛もありますよ。

★イカ良いですね! 魚介類が大好きなんです。日本茶もよく飲みます。カテキンが多くてダイエツトに良いと聞きましたよ。

佐賀は食べ物が美味しく良いですね。免許をとって近場を走り尽くしたらぜひ行ってみたいですね。

★ところで話題の映画「苦役列車」でヒロイン役として出演されていますが、山下敦弘監督の現場はどのような様子でしたか。

「山下監督の「天然コケッコー」と「リンドー」が大好きで、撮影は大変でした。独特の世界を持っていて、他のどの監督とも違います。監督がやってほしいということは全力投球でやりました。絶対見て下さい!」

★国民的アイドルグループのセンターというポジションから卒業。世の中を勇気づけるようなエールを交えて、これからの決意を聞かせてください。

「私は今まで仕事に対して受身な感じで作ってきたタイプです。自分ではそれが一番あっていいと思っています。芝居のときも自分から積極的に動くのも大事ですが、作り手側の監督さんが言うことの方が正しいのかな、と思うことが多いです。し、こうやって、と言われたら、それをやろうと思っ

ています。仕事に対しても、自分でこうやりたいと思うことはたくさんありますが、私を必要としてくれるのであれば、それを全力でやっています。それが私の決意です。

★ステイジが変わっても、自分を必要としている人のためにやっています。そうですね。どう全力で応えていくか。例えば、いろんな人にプレゼントしてもらった映画ソフトを見ることも「栄養」になると思っています。実力が必要な世界なので、そのために何をしたら良いのか、何が出来るのかを考えていきたいです。いろんな場所へ行くことも、人生経験として糧となると思っています。

プレゼント



前田敦子さんのサイン入りMOTEMOTEさがを3名の方にプレゼント! 詳しい応募方法はP130をご覧ください。



佐賀から2014年のソチ冬季五輪での金メダルを目指すスノーボード選手・加藤彩也香さん(19)。さまざまな壁を前向きにクリアしてきた加藤さんに、これまでの挑戦と、これからの目標について聞いた。

ソチ五輪で「金」目指すスノーボード選手 加藤彩也香さん(19)

加藤さんがスノーボードを始めたのは10歳のとき。地元の天山スキー場だった。ウインタースポーツ好きの家族と一緒に、競技スキーを楽しんでいたが、すっかりスノーボードにのめり込む。「大自然の中に一人の間人として溶け込む。ジャンプを跳んだときのふわっとする感覚。パウダースノーを滑ると、浮いているような感じ。非日常感はまるで天国にいるような感じがします」と加藤さんは、その魅力を語る。

3学期は北海道生活

福岡にあった室内ゲレンデに週3回通い、約6時間近くジャンプの練習などをこなす。7歳上のお兄さんも一緒だったが、時には一人で列車とバスを乗り継いで行くことも。「室内なので季節に関係なく練習できますが、夏に大きなボードを背負っている小学生を見て、乗客の人が驚いていましたね」と加藤さんは苦笑する。冬休みの間は北海道に家を借りて本場での練習に励んだ。

翌年からは3学期すべて休んで北海道で生活。学校の理解もあり、自学自習で勉強も頑張りながら夢に向かって突き進む。天山のジャンプ大会の一般部で優勝。小学6

出身地、種目、ケガ… 前向きに壁乗り越え

年生での栄冠はもちろん最年少記録だ。全日本スノーボード選手権のハーフパイプでは5位に入った。雪がほとんど降らない九州からの挑戦。ウインタースポーツの盛んな地域に比べて施設や競技人口などにハンディがあることは否めない。「九州生まれだからこそ、上質な雪で練習できることの有り難さがよく分かります。一本一本を大事に集中して滑っています」と加藤さん。スタート地点の不利を前向きに捉えることで大きく成長していく。

国内公式戦がない新種目

ジュニア部門で優勝を積み重ね、2008年には「FIS kids markcup」



鶴田整形外科でのトレーニング



のハーフパイプ競技一般女子で10位。国内トップボーダーの仲間入りを果たした。そして五輪を目指す上で大きな決断をする。ハーフパイプではなく、ソチ五輪で初めて採用される「スロープスタイル」に出場種目を絞ったのだ。スロープスタイルとは斜面にジャンプ台やさまざまな障害物を設置して滑る競技。ジャンプした際の空中での技の難度などを採点する。国内でも競技人口は多いが、日本スキー連盟はスノーボのスロープスタイル競技の公式大会を開催していない。五輪出場には世界各地で行われるワールドカップを転戦してポイント稼ぎ、世界ランク30位以内に入る必要がある。日本の選手が同種目でワールドカップに出場するには、国内のハーフパイプ大会で好成績を取らなければならない。五輪出場の前の前の段階に存在する日本独特のハードルだ。

大けがでシーズン棒に

さらなる壁に挑戦しようとしていた加藤さんを大きなアクシデントが襲う。10年、カナダでの撮影中にジャンプの着地に失敗し前十字じん帯を切る6カ月の重傷を負ってしまう。専門の医師がいる大阪の病院でのリハビリ。落ち込みがちな気持ちを奮い立たせたのは一冊の本だった。「友人から『懸命に生きる子供たち』という本をもらって。アジアの恵まれない子どもたちが過酷な状況の中、必死で生きる姿に大きなショックを受けました。スノーボが出来る環境にいる自分世界のために何が出来るか、そういう使命感が芽生えた気がします」

11年シーズンは棒に振ってしまいが翌シーズン復帰。ハーフパイプで3回入賞し、ワールドカップの出場資格を得た。実は膝の状態はあまり思わしくなく、医師には欠場を薦められていたという。「どうしてもソチ五輪に出たい、という気持ちから、ナショナルコーチに内緒で出場を続けました。痛みはすごかったです。心の中に芽生えた『使命感』が新たな壁を乗り越える原動力となった。



最後の壁であるワールドカップへの挑戦を控え、加藤さんは佐賀で基礎トレーニングに励んでいる。世界で戦うためには、技の構成も高度になる。「元々、無難な技を選ばないのが私のポリシー。妥協した技を選んで勝つても駄目というスタンスで国内も戦ってきました。世界で通用することが目標です。世界での戦いがどういうものか、すごく楽しみです」と瞳を輝かせる。気がつけば、日本人女子唯一となるスロープスタイルのワールドカップ出場選手。「家族を含め、佐賀の人たちにたくさん応援してもらったから今があります。パイオニアとして、この競技を切り開いていくことで、少しでも期待に応えられたら、金メダルを目指して、あきらめず努力していけば、一歩ずつ夢に近づいていく。それを証明すること、たくさんの人を勇気づけられたらいいですね」。加藤さんはたくさんのハーフパイプを乗り越え、次のステージをまっすぐ見詰めている。



実家は「嬉乃すし」

最後の壁であるワールドカップへの挑戦を控え、加藤さんは佐賀で基礎トレーニングに励んでいる。世界で戦うためには、技の構成も高度になる。「元々、無難な技を選ばないのが私のポリシー。妥協した技を選んで勝つても駄目というスタンスで国内も戦ってきました。世界で通用することが目標です。世界での戦いがどういうものか、すごく楽しみです」と瞳を輝かせる。気がつけば、日本人女子唯一となるスロープスタイルのワールドカップ出場選手。「家族を含め、佐賀の人たちにたくさん応援してもらったから今があります。パイオニアとして、この競技を切り開いていくことで、少しでも期待に応えられたら、金メダルを目指して、あきらめず努力していけば、一歩ずつ夢に近づいていく。それを証明すること、たくさんの人を勇気づけられたらいいですね」。加藤さんはたくさんのハーフパイプを乗り越え、次のステージをまっすぐ見詰めている。

スクリーンに浮かぶ折り紙で作られた英字。触れると折り方が分かりやすく表示される。株式会社センターウェブ代表取締役・武藤樹一郎さん（37）が開発したiPad用アプリ「折り紙アルファベット」。「これは今日リリースしようと思っています。アプリを作るのは、大きく儲けるためではありません。次の波に備えるための腕試しとモチベーション維持のために開発しています」。ウェブサイトの開発を中心に世界的に活躍している武藤さんが佐賀に帰郷して約1年。これまでの道のりと、これからの仕事について聞いた。

iPadアプリなど開発 株式会社センターウェブ 代表取締役 武藤樹一郎さん (37)

「小さいときから運動障害を抱えていて板書をノートに書き写すことに苦労していましたが、だから勉強して良い大学へ行くのではなく、できれば芸術の道に進もうと決めていました」。高い窓から柔らかな光が降り注ぐ事務所に武藤さんの力強い言葉が響く。床には赤や青の絵の具が残ったまま。学生時代に使っていたアトリエだという。武藤さんは高校卒業後に渡米。「英会話なんて全くできなかった。『地球の歩き方』すら持って行かなかったです」と武藤さんは笑う。大学で語学を3カ月勉強した後に、ニューヨークのスクール・オブ・ビジュアル・アーツ(SVA)へ進学する。かつてキース・ヘリングも学んだ全米有数の美術大学だ。



アプリ「アルファベット折り紙」

違うのが当然の国

ニューヨークでの生活は刺激的だった。「人種や宗教などいろいろな人が暮らしている国。違うのが当たり前なので新鮮でした」。古本屋で本を買うと、いつも同じ筆跡の書き込みがあった。「哲学書や文学書。名前も顔も知らないけど、近い感覚の人がいるというのが面白かったですね。自宅は日本人音楽家とシェアしていました。音が大いので寝るのは押し入れ。ヘッドフォンでワグナーを聴きながらニーチェを読むと、19世紀の空気に浸ることができました」。武藤さんが住んでいたイーストビレッジには日本人留学生も多く、いろんな催しがあちこちで開かれていたとい

次の波が来るまでどう備えるか

う。自由な空気を満喫していた武藤さん。2年間で日本の大学4年分の学費を使いきってしまう。そこで始めた仕事はウェブの世界との接点となった。「新しいソフトの能力を試す実験的なプロジェクトでした。そこでウェブサイトを作れといわれて。経験はなかったのですが本屋で技術書を買ってきて1週間で形にしました。当時はまだウェブも出始めて簡単なものを作っていました」。

ベストのものは当たり前

美術家としても、SVAの学長に認められ、展覧会を開催することになった。「そのタイミングでしか作れない作品。そのときの人の意識を反映した表現に、アートヒストリーに残る可能性を感じとってもらったということでしょうか。展示は無茶苦茶クールでハイテンションなものができました」。このショーを評価した大手ジンズメーカー・リーバイスに、ポスターを描いてくれ、と頼まれる。プレゼンをウェブでしたところ、ダウンタウンのアートフェスティバルのサイトの仕事を紹介された。「アートフェスティバルのサイトが年間ベスト5の作品に選ばれて。そこから国連のウェブにも関わることになりました」。米国コロンビア大学デジタルメディア科修士を修了しアメリカと日本を行き来しながら、ウェブ関連の仕事を手掛けた。ビジネス的にも成功。「ニューヨークにいたときは、ベストのものは当たり前、今までにないものをどう作るか、という高いテンションの中で仕事をしていました」。

細部にもこだわり

2006年に帰国。昨年から震災の影響もあり、地元の佐賀に住まいを移している。現在は日本各地にいるスタッフと協力しながら漢字の書き方を学ぶアプリなど教育を中心に開発。「楽しくゆるく学べて、子どもに安心して与えられるよう心がけています」。細かい部分にもこだわりが込められている。モニターの高画質化に伴い、アプリで表示される漢字の周辺に細かいギザギザまで見えるようになった。気にな

った武藤さんは、アプリに収録された全漢字一つ一つからギザギザを除去した。手間暇かけて育てたアプリは有料教育ソフト部門で上位をキープしている。

「佐賀はのんびりして空気もきれいで良い面もたっぷりある。今は佐賀だけでなく、日本全体が先行き不透明な時代。ニューヨーク時代のハイテンションな仕事は懐かしいですが、次の波が来るまで生活環境の良い場所です。今後はニューヨーク時代に始めて、今は海外27都市に拡大した『海外生活』という海外生活支援ポータルサイトをもっと磨きをかけて、生活を楽しくする情報インフラに育てていきたい。そういうプロジェクトが佐賀から広がっていきなすね」。



「高齢化社会の中で、お客さまは自らの将来への不安を抱えながら、安心して過ごせる社会、ライフスタイルを構築しよう」と模索しています。そういう方たちの健康を足元から支え、明るく元気な生活を応援する『足に優しく人に優しい』モノ作りを主眼に置いています。佐賀、福岡、長崎、熊本で『靴工房ジャンボ』を14店舗展開する株式会社ティックワールド代表取締役・田村繁幸さん(75)は自らの使命を熱く語る。

田村さんは北九州市出身。佐賀大学経済学部に入學。就職先も決まらないまま、卒業のあいさつに行った研究室の教授が紹介してくれたのが、佐賀市内の靴メーカーだった。最初の仕事は内勤。受注台帳とにらめっこしながら、卸業者と工場の橋渡しをする。しばらく勤務した後、家庭の事情で退社する。故郷に帰り、当時始まったばかりの有線放送をいろいろな店舗に導入する会社を始めた。「最初は景気が良かったので、飲み屋さんがどんどん加入してくれました。当時の平均的な月給の10倍ほどは稼いでいました。でも数年すると飲み屋さんの支払いが悪くなって。この辺が潮時と妻と子どもが住んでいた佐賀に戻ることにしました」。佐賀に戻った田村さんが訪ねたのは以前勤めていた靴メーカー。田村さんは30代前半。ここから靴一筋の人生が始まる。

ヨーロッパで衝撃

“出戻り”の田村さんに与えられたのが商品開発の仕事。視察に訪れたヨー



靴工房ジャンボを展開する 株式会社ティックワールド 代表取締役 田村繁幸さん(75)

りこない。そんな中、以前働いていた佐賀の靴会社の先輩からアドバイスを受ける。「佐賀にも人脈があるだろう」と言ってくれて。県に相談に行き、連れていかれてもらったのが、この工場がある富士町。見た瞬間、これだ!と思いました。すぐに書類作成に取り掛かる。しかしまた大きな出来事が起きる。

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災。神戸にあった田村さんの工場も大きな被害を受ける。資金繰りの問題もあり、佐賀工場新設の話は一時、白紙に。でも諦めきれなかった。機械を佐賀に運び込み、神戸のスタッフが工場泊まり込みで佐賀のスタッフに指導した。震災の年の秋には操業開始。「質は神戸と雲泥の差。スタッフが喜んで働いてくれたことにも勇気づけられました」。数年前から中国での生産も行っているが仕上げは佐賀で手掛けている。「今や中国は靴生産の世界的拠点。良い素材もたくさん集まりますし、加工能力もほとんど上がっています。それでも最後は佐賀で作らないと」

小売参考商品企画

本社移転の際に神戸から持ってきたアウトレット商品を従業員に格安で分けたところ、口コミで広がり工場事務所にお客さんの行列ができた。それを見た田村さんは売場スペースを作る。靴工房ジャンボの誕生だ。ちなみにジャンボは田村さんの愛犬の名前から付けたという。現在、佐賀、福岡、長崎、熊本に14店舗を

展開している。

現在の売り上げは、OEM(納入先商標による受託製造)生産と小売販売が半々。OEM生産は百貨店系の卸会社に持っていくが、企画は田村さんの会社が行う。毎年、渡欧しサンプルとして40足以上を購入し参考にする。「小売りをするとお客さんの反応が分かる。これはダメだろうと、思っていた商品がヒットしたり、こちらの思い込みだけでは変化に対応できません。きちんとデータをとり、商品企画に活かしています」。

店舗スペースの奥にあるアジアンテイストのテーブルで話を聞いていたら、高齢の母娘さん2人連れが入ってきて、靴を選び始めた。お母さんに赤いスニーカー風の靴をはかせる娘さん。

その様子を見ながら、田村さんは静かな口調でこう語った。「昔はお年を重ねたらモノトーンという感じだったが、今は年齢に関係なくカラフルなものを選ぶ方も多いですね。心を明るくする履きやすい靴を作ること、いくつになっても元気に動き回るようになってもらいたい。靴屋にもそういう社会的使命があります。佐賀は魅力ある場所です。特に富士・三瀬地区は空気と水、食べものは美味しいし、温泉まである。癒しをテーマにまちづくりを進めたら良いと思います。その核として健康につながる靴づくりがあります」

明るく元気な生活 足元から支え

ヨーロッパで大きな衝撃を受ける。「靴業者向けのツアーがあり、フランス、イタリア、イギリス、ドイツ、北欧、スペイン、ギリシャを2、3週間かけて巡る旅でした。最初にパリのド・ゴール空港に降り立ったときには感動しました。パリのショーウィンドウは夜中でも明るく、街が寝静まったのを見計らって、たくさん写真を撮った」。

帰国後、会社の会議でヨーロッパで撮った写真を見せながら、ヨーロッパの靴デザインに対して日本のそれがいかか遅れているか力説。社長がヨーロッパのメーカーとの技術提携を即断し田村さんを担当に指名する。靴製造機械のメーカーを仲介にイタリア・パルマの会社と組むことが決まり、再びイタリアへ行くことに。その時のパルマの靴会社の社長との出会いこそが田村さんの財産となる。「その社長からは靴に関するあらゆることを伝えてくれました。素材のこと、作り方、そしてデザイン。靴の心を教えてもらいました」

帰国後、最初に取りかかったのが素材集めだった。当時、日本では化学物質を使った「なめし」が主流。カチカチに硬かった。自然素材を使ったイタリアの「なめし」は柔らかく肌触りが良い。「イタリアで無理に売ってもらった革の見本を見せて、同じようなものを作ってくれる工場を探しました。なかなか見つからず苦労しました」

実績が認められ30代後半で役員に就任。しかし順風満帆に見える田村さんの靴人生に大きな転機が待っていた。オイルショックの時代、従業員1500人の

うち1500人をリストラすることになった。労使交渉は難航。結局、役員は総退陣することとなった。「仕事を辞めて3カ月くらい家にこもり今後について考えました」。東京の業界関係者が紹介してくれた中から神戸の会社を選び、新たなチャレンジに取り組み。「社長の『流通なきファッションメーカー』という言葉に惹かれて選びました。製造から小売りまで行いたいという意欲に動かされて」。開発部長という役職につき社長と二人三脚で取り組み、会社の規模を拡大すると成功を収めた。

52歳で独立

順調に仕事をこなす中、52歳で独立を考える。「60歳まであと8年。自分で事業をしたいと家族に相談し了解を得ました。自宅を担保に資金を借り、これまでに培った人脈に助けってもらいながらスタートしました」。2年間は下請け工場生産していたが、その後、自社工場を構える。製造するうちに、品質に不満が高まっていく。「大阪は食いだおれで神戸は履きだおれ。当時、神戸には靴製造の関連会社が500社くらいありました。職人もすぐに集まりますが歩合で働くのでスピード優先。何度言っても質が上がらない。こうなれば素人に一から指導した方が良いと思って」。田村さんの脳裏に浮かんだのが、かつて「靴の心」を教えてもらったパルマの靴工場。緑溢れる山の中に赤レンガの建物が印象的だった。

田舎で工場を作ろう。最初は島根の下請け工場を買うことも考えたがしっく



靴工房ジャンボ
代表
田村繁幸